

## 埋もれた宝を手に入れる方法

R. H. デイヴィス      S. Tajima 訳    ver1.0 © 2021

これから、埋められた宝を探す本当の話をしよう。これからの話で、事実と異なるのは、一緒に宝を探すことになった男の名前だけだ。彼の名前を伏せない限り、僕は話しを書けない約束となっているところか、宝探しは彼の探検であって、僕が何らかの利益を得るとすると、この書いたものからの印税だけなのだ。僕は、この話しは公開すべきだと思っている。理由は、僕たちの経験はユニークで他の人にも役立つかも知れないからだ。それに僕は金が必要なのだよ。

しかし、約束の中には、僕が彼をどう思うか、あるいはどの位、彼の発言や行動を正確に描かねばならないかというのはいらない。そこで、僕は彼の言った事、した事をそのまま書く。

名前を付けない訳にはいかないから、彼の事をエドガー・パウエルと呼ぶことにする。苗字の方は、まあ、適当につけたのだが、名前は一応考えて、こう決めたのだ。我々の探検のリーダーであり、責任者かつ頭脳でもある男なので、エドガーと呼ぶのがふさわしいと思うのだ。エドとかエディーというのは不適當だ。彼の背中は気楽に叩けないのだ。

僕たちは同じ大学の同窓なのだ。しかし、六百人もいたから、同窓といったって、単なる知りあい程度だった。あの時代以来、彼が、宝の件で僕に面会を求めて来るまで会ったことは無い。僕が知っていたのは、彼は親父さんの事業である、非縮フランネルの製造事業を継いだという事だけだ。もちろん、読者はそれが彼の製造する商品その物では無いことは分かるだろうが、ま、そんな物だ。それが彼の関係する商売というのはわかるだろう。僕の仕事とはかけ離れているので、彼から『非縮フランネル』の名前入りの紙に書かれた手紙を受け取った時は

相当に不思議に思った。それには『双方の利益につながる』事業について面会したいとあったのだ。

何日か後の九時が、彼が都合がいいと言うので、ニューヨークの僕の家で会う事にした。

頬ひげを生やし始めた以外、昔と変わらない。痩せていて背が高く、薄い胸で猫背だ。彼は眼鏡を掛けていて、昔と同じ様に、相手を怪しそうに用心しながら見た。金を貸してくれと言ひ出さないか、自分が冗談の種にならないかという感じだ。僕はエドガーをこんな風に思った事もないので、いらいらさせる奴だ。

しかし、昔の通り、お互いを名前で呼び、僕の差し出した煙草を胡散臭そうに取った。そして、僕をあの目と眼鏡で見つめ、秘密を守る事を約束させると、突然話し出した。

「我々の工場は、」と彼は言った。

「ニューベッドフォードにあるんだ。私はそこフェアヘイブンに何件か小さな家をもっていて、安い家賃で貸している。この間、テナントの一人のポルトガル人の船乗りが突然発病して、私に来てくれと言った。彼はベッドフォードから南の海の方に何回も航海をしていてね、捕鯨だよ。前回の航海で、前に住んでいたテネリフの家に立ち寄ったんだとさ。そこで彼の爺さんが、そのまた親父から残された、ある文書を彼に渡した。彼の爺さんが言うには、そこには秘密が書いてあるのだが、アメリカに行かないと価値が無いのと、帰った時、誰にそれを見せるか良く気を付けろとの事だ。彼が言うには、ある種の英語で書いてあるが、その男には読めず、また誰かに読まれはしないか心配していたんだ。

彼は、家賃の滞納分の代わりに、その文書を私に預かって欲しいと言う。尤も、私はそれを開けて見ない事、それから彼が回復したらそれを返すという条件だ。もし彼が何とか病気に打ち勝ったなら、何か他の方法で家賃を払うと言う。しかし、死んでしまったらそれは私の物となる。そして一月程前に、彼は亡くなった。そこで文書を調べたんだ。それは、海賊の宝がどこに埋めてあるかという内容だった。そしてだ、」

エドガーは僕が何か反対するとも言いう様に、睨みつけ

「私は、それを掘り出すつもりだ」と言った。

もし、彼がロッキーマウンテンをベイビーライトで横断するとか、<sup>1</sup>コティオンを踊ると言ったならばここまで

<sup>1</sup> ライト兄弟の製作した小型機。

<sup>2</sup> 十八世紀の社交ダンス。

驚かなかったろう。という訳で、大声で笑い出してしまった。

「君が！ 宝探しをするのかい？」私は叫んだ。

僕の言い方に、彼は見た目にも機嫌を悪くした。眼鏡さえ僕に文句を言った。

「いったい何が面白いのだ」エドガーは冷たく言った。

「単なる、仕事の相談だよ。少ない経費で、うまく行けば収益は大きい筈だ。大体百万ドル程度だと見積もっているがね」

今日の日でさえ、アメリカ人なら、百万ドルと聞けば穏やかではいられない。彼の手紙には『双方の利益につながる』とあったのだ。僕は彼に敬意を表すと共に丁寧になり、卑屈になったと言ってもいいかも知れない。何と言っても大学時代の絆はそう簡単に切ってはいけないのだ。

「何か僕に出来る事があるならば、エドガー君」と私は彼を心から安心させようとした。

「君の発見に助力できるなら、勿論僕は充分うれしいね」残念なことに、僕のこの気前のいい申し出も彼には通じなかった。

「この件に関して、君に会いに來たんだ」彼はぎこちなさを崩さず言った。

「と言うのは、君は埋もれた宝を探す様なことに興味を持ちそうだと思ったからね」

「その通り、昔からね」と私は断言した。

「君は、」彼は探る様に言った。

「こういう具体的な経験があるのかね？」

僕は、極めて平静を装った。しかし、この時、暖炉のメンテナンスの仕事に応募したら、六十馬力の発電機が操作出来るかと聞かれた男の気持ちがあった。

「僕は、実際に埋もれた宝を見つけ出した事は無いけれどね」と私は認め、

「でも何処にそう言うものが沢山あるとか、どう探したらいいかとは充分理解しているよ」と専門知識で誤魔化そうとした。

「もちろん」とちよつと気取りながら

「ココス島の探検の話は良く知っているし、トリニダードのペルーの宝物の話し、グアダラハラ近辺のハリスコ辺りの失われた宝の話しだ。グランドケイマン島の沈没したガレオン船もあるし、僕がパン島に行った時

など、非常に良さそうな話に幾つか誘われたことがあった。それに故人だがポイントン船長からも誘いが有って…」

「しかし」とエドガーは、下らない話を遮る様に言った。

「君自身は、資金提供とか、探検を組織した事は無い…」

「ああ、それは簡単だよ！」私は、納得させようとした。

「装備とかに関しては、僕がやるよ」と自信を彼に分からそうとした。

「エリーベイスン<sup>3</sup>に、いつでも貨物船がいてね、どんな冒険にでもチャーターできる。それに、この手の仕事に向く連中、海賊もどき、職業革命家も充分知っていて、軍艦だって仕立て上げられるぜ。みんな、危ない橋を渡ってきたいい奴らだ。あいつらなら地獄にまでだって一緒に連れて行けるからね、勿論そこから帰って来て…」

「それこそ、」

「私が、一番恐れている事なのだ！」エドガーは叫んだ。

「何？ どう言うこと？」私は大きな声をだした。

「そう言うのこそ、私が避けたいという事だ」エドガーはきっぱりと言った。

「私は、危ない橋を渡る気などない。地獄へも行きたくないのだよ」

僕は、ちよつと興奮しすぎて彼を警戒させたと思い、もう少し穏やかに続けた。

「宝を探す探検と言うのはね、」私は、指摘した。

「リスクを伴わない事は無いんだよ。よく訓練された、まともな連中を雇わないといけない。反乱という場合を想定して見ろよ。帰りの航海で、宝を奪い取る事もある。だから信頼できる連中が必要だ。それにウィンチェスター銃を扱える必要がある。僕なら、どちらもできる連中を集められる。バンナーマンに頼めば、ゲートルから速射砲まで何でも揃う。クラークストリートの店で僕の名前を出せば、船用品、水圧ポンプ、ダイバー用ヘルメットまで何でも…」

エドガーの眼鏡は冷たさと、軽蔑で霜が付き始めた。彼は、これは駄目だという感じで頭を振った。

「私は、これを心配していたんだ」と呟いた。

僕は、何とか彼を安心させようと頑張った。

「ちよつとした危険はさ、面白さを増すんだよ」と笑った。

「君に理解して欲しいんだがね」エドガーは腹をたてていった。

<sup>3</sup> ニューヨーク湾の人工港で、1830年頃から開発が始められた。

「どんな危険も無い。面白さも無い。単なる、仕事上の提案なのだよ。いわば君の反応を見るために、あの質問をしたんだ。そして結果は私が恐れた通りの方向となった。実際、そうなる場合を考えていた」彼は、残念そうに説明した。

「私は、君の書いた話をいくつか読んだ。皆、冒険だとか、流血と暴力だ。よく考えられた物語ではない。それから判断すると」と責めるような調子で付け加えた。

「ロマンティックな物が好きなのだ」彼は、僕が癲癇持ちか麻薬をやっているかの様に苦々しく言った。

「残念だけど」と僕は、認めざるを得なかった。

「海賊だとか埋められた宝とかは、僕にとっては冒険を意味するのさ。それに僕の著作についての、君の批判は真摯に受け止めるよ。他の連中も同じ、どうしようも無い弱さがあるんだ。結局、皆が、非縮フランネルを製造する訳にはいかないからね」と指摘した。

彼の幸運な事業について、敬意を評したことで、エドガーは軟化した様だった。

「君の言う事は分かるんだよ」と彼は言った。

「この件については、殆どいつも、君と同じ視点から進められてきたんだ。そしてね、」彼は、理は自分にあるという調子でいった。

「結果を見た事があるかい？ 失敗さ。あるいは良くても、成功するまでに、不必要で、痛ましい血だの命が失われる。だが、私の探検ではね、全く血が流れることも無ければ誰も死んだりしないんだ。私は、この件、慌てて考えた訳では無いよ。色々情報を集めて、他の連中の失敗から学ぶことにしたんだ。この件を取り上げると決めた時にね」彼は説明した。

「埋もれた宝を探すと言う本は全部読んだ。そこで分かったんだけど、みんな同じ間違いをしている。そして、その間違いを正そうとして、誰かを殺す事になる。つまり、そういう間違いを最初からしなければ、誰も殺す必要なんて無いし、誰も私を殺そうとする機会も発生しない」

「君は、我々がスクーナを用意し、乗組員を募集すると言う。何が起ころと思う？ 額に刀傷がある男、片目に黒い眼帯をした男というのが、乗組員の中に必ず居るんだ。そして、出航したとたん、そいつは我々に対して、陰謀を始める。悪人らが寝ている筈と思った、船室給仕がこれを聞き込んで、我々に知らせようと後甲板に来る、銃声、そしてその給仕は船室梯子の足元に落ちて来る。いつも最初にやられるのは給仕だ。その後、反乱者は、

一等航海士を殺し、我々を船室に閉じ込め、船を乗っ取る。その後ラム酒の樽に穴を開け、夜中じゅう、やつらの酔っ払い声を聞く訳だ。船室の換気孔からは、一等航海士の死体が風下側排水溝の中で転がるのが見える」

「でも、君は忘れているよ」と私は一生懸命抗議した。

「いつも、乗組員の中に、必ず一人忠実な奴がいて……」

エドガーは苛立って僕を遮った。

「もちろん忘れていやしない」彼は言った。

「そいつはでかいジャマイカの黒人とか、船の料理人だ。だがいつもやられてしまう。永久にだ。あいつらはその男を鯨のいる海に放り込む。そして我々はヤギしかいない島で野営することになる。我々が防護柵を作ると、奴らは、白旗をたてて取引にやってくる。そして我々は、奴らの言う名誉を信じて、あほな事に、外に出て話そうとする。そこで、奴らは我々全員を撃ち殺し、軽蔑し笑いながら引き上げる」

エドガーは僕を見ながら、軽蔑した様に眼鏡を直した。

「私が正しいと思うかね、それとも間違っている？」彼は答えを要求したが、僕には答えられなかった。

「ただ一人の男だけが、」エドガーは続けた。

「こういう件について、多少とも知恵を使ったな。そいつは『黄金虫』に出て来る男で、まず余計な事を一切話さなかった。誰にも、そいつが埋もれた宝を探しているという事を悟らせなかった。宝を見つけるまではだ。私はそう言う風にやるのだよ。正確に、何処にあるか知っていて……」

僕は多分、自分が気が付かないうちに、興味がある事を示したのだろう。エドガーは話を途中で止めて、馬鹿じゃ無いという風に、首を振った。

「もし、君がその地図を私が身に着けていると思ったら」と勝ち誇った様にいった。

「考え直した方がいいね！」

「まさか！僕はそんなことは……」と抗議をした。

「ま、君では無いかも知れない」不承不承言った。

「でも君の日本人の使用人があのカーテンの後ろにいて、私の帰りをつけて来て、夜になってから……」

「使用人は居ないよ」と抗議した。

エドガーは極めて不快な、自己満足の笑いをしただけだ。

「ま、気にするな。誰も地図を見つけられないし、地図を見る事も、宝がどこにあるかも、私がその場所を示すまで分からないからな」とエドガーは断言した。

「君の用心深さには脱帽するよ」と言った。

「でも、どうしてその場所を指定できると言うんだい？ 地図には『沈んだ谷を通り、魔女の鍋に至り、北東北に四点、絞首台の丘、夜明けに影の落ちる処、五十尋西、北に五十歩、鳥の飛び立つまで、七つの井戸』なんてあるのだよね」とからかった。

「一体、どうやって、そんな場所を見つけると言うんだよ」と私は叫んだ。

「そういう風な地図じゃない」エドガーは嬉しそうに叫んだ。

「もし、そんな物だったた、私はこんな話しには乗らない。混血のポルトガル人船乗りじゃ無ければ、誰でも理解できるものなのだ。洗濯屋の請求書と同じ位だ。それにはこう書いて有って……」彼は、心配して中断したが、注意深く続けた。

「それにはね、ある場所に何かがある。どこから何とかな場所、三つのかんとかがある。そしてこの三つのかんとかの真ん中に宝が埋めてある。ね、簡単だろ」

「君が漏らした、そのちよつとの手がかりから」僕は言った。

「その場所なんて、寝ていたって分かるよ」

「そうは思わないね」とエドガーは、不安そうに言った。そして、余り話さない様にと、警戒したのが分かった。

「そして、」彼は続けた。

「私は、君をそこに連れていってもいい。ある条件の元にね」

エドガーの侮辱的な用心に、僕は苛立った。

「どうして君は、僕が信用できると言うのかね？」私は傲慢に訊いたが、百万ドルの内の、取り分を考え、急いで付け加えた。

「もちろん、条件は飲むよ」

「もちろん、君の言う通り、あるリスクは取らないといけない」エドガーは続けた。

「だが、これは確かだと思うのだが」僕を疑わしそうに見て言った。

「君は、あからさまな強盗はやりそうも無い」僕は、謝意を表した。

「まあ、そういう誘惑に駆られるまでは」エドガーは言った。

「誰が何をしでかすか、なんて分かる奴はいない。私は、単にもう一人、手助けが要る。そして君を選んだのは、君がそれを書いて稼げるからだ」

「なるほど、僕はその探検の記録係と言う訳か」と言った。

「それは、後で考えればいい」エドガーは言った。

「私が、主として頼みたいのは掘ることだ。君は掘る事ができるかね？」彼は、熱心に言った。僕はできると言ったが、他の事の方がやりたいと思った。

「もう一人必要だ」エドガーは繰り返した。

「充分頑丈で、掘ることができる男。充分誘惑に強くて、私を殺さない男」言い返すことは簡単だったが、黙っていた。それにエドガーには言ったって無駄だろう。

「ま、君に頼む事を考えようか」と気が進まない様に言った。

「そこで、条件だけね」

私は、出来るだけ愛想良く微笑んだ。

「君は、秘密保持については、すでに誓った」エドガーは言った。

「このあと、全ての詳細について私の言う通りにするのを、まず合意して欲しい。そして、ある場所に出かけ、そこを掘る。もし私が宝を発見したら、それを私と一緒に警備する、これも合意が必要だ。そしてそれを私が、安全だと思う所まで運搬する。君の責任はそこで完了する。宝が発見されてから一年後には、君はその探検のことを書くことができる。書いたもので、雑誌が印税を払うだろうが、それが君の取り分だ」

僕は、急いで百万ドルの取り分について計算してみたが、それは少なくとも五分の一だ。僕はもう、十万ドル使ってしまった、完全に自分の収入以上の暮らしをしていた。サウンド<sup>4</sup>の沿岸に農場を買い、モータボート<sup>4</sup>が一艘、それに三台の車<sup>4</sup>の車種がいいかまだ分かっていない<sup>4</sup>を買い込んである。僕は、自分の金で劇を書きあげ、看板はブロードウェイで電気で照らされているが、まだどの劇場からもオフア<sup>5</sup>が無い。ホランダー<sup>5</sup>ライフル<sup>5</sup>を<sup>5</sup>買い、本物の象牙の葉巻ホルダー<sup>5</sup>を買い、秘書を雇っている。彼はテニスができ、ラグタイムも演奏できる。それに毛皮のコートも買ってある。

<sup>4</sup> ニューヨーク州からコネティカット州にまたがる海岸。

<sup>5</sup> 並行する二本の銃身を持つ、大型獣の狩猟用ライフル。



つまり、エドガーの気前のいい条件というのは、僕を丸裸にするものだ。僕が再び、狭いフラットに閉じ込められ、路面電車の揺れに慣れたところで、情けない気分で訊いた。

「それだけかい？」

「それ以上、何を期待するのかね？」エドガーは、強く言った。

「君の宝では無い。私の工場から、何かプレゼントがあるとは思わないだろう？ それなら、なぜ私の宝からの分け前を期待するのかね？」僕を責める様に見つめた。

「私は、君が喜ぶと思ったがね」彼は言った。

「書く材料を見つけるのは大変だろう。私は、ネタをただで提供しているのだよ。私は……」彼は忠告した。

「君は、この件に飛びつくと思った。埋められた宝を掘り出すなんて、毎日あるわけじゃない」

「ま、それはいいんだが……」僕は言った。

「多分、君の言う通りだと思う。しかし、僕の時間にも若干価値があってね、単なる興奮の為に自分の仕事を放り出せないんだ。何週間も、何ヶ月も。どの位時間がかかると……」

エドガーは眼鏡の後ろで、非難するようにウインクした。

「それは誘導尋問だぜ。正当な費用は負担するから——移動費用、食費、宿泊——君には金銭的負担は発生しない。その後君は、話しを書く、私の名前を出さずにだ」そして、急いで付け加えた。

「私の仕事に差し支えるからね。君はその話しの印税を受けとる」

僕はエドガーの負担での航海を想像した。椰子の葉、サンゴ礁が見えた。金貨の箱につるはしを打ち付けた時には筋肉が痛み、首や肩から汗が落ちるのが見えた。

「一緒に行こう！」と言って、握手をした。

「いつ出発するのだい？」と訊いた。

「今これから！」エドガーは言った。

僕は、彼はテストをしているのだと思った。僕の一番の自惚れに触れてきたのだ。

「問題無いよ！」僕はいった。

「僕の鞆は、この世界のどこにでも行ける様に用意してある。寒い処を除いてね。何処だい？ 黄金海岸か、象牙海岸か？ カリブ海か？」

不可解にもエドガーは顔をしかめた。

「君、空のスーツケースを持っているかい？」と言った。

「どうして空じゃなきゃいけない？」僕は訊いた。

「宝を運ぶためさ」エドガーは言った。

「私は、ホールに自分のを置いてきた。二つ必要なのでね。」

「君の旅行鞆は？」僕は言った。

「旅行鞆は要らない」エドガーは言った。ポケットからニュージャージーセントラル鉄道の時刻表を取り出した。

「急げば」彼は言った。

「十時半の急行に間に合う。ニューヨークには夕食までに戻る。」

「宝はどうするんだよ？」僕は大声を出した。

「我々が持つて来る」エドガーは言った。

僕は情報を要求した。僕は信頼を要求した。彼はどちらも拒否した。僕は、少なくとも自分の拳銃を持つていくと言いつ張った。

「誰か、我々から宝を取り上げようとしたらどうする？」僕は指摘した。

「誰もそんな事はしない」とエドガーはきっぱりと言った。

「だれもスーツケースの中に埋められた宝を入れているなんて思わない。パジャマが入っていると思うだけだ」

「じゃ、脚色のためだ」僕は頼んだ。

「僕は、重武装して出かけたと書きたい」

「じゃ、書けよ」エドガーはぴしゃりと言った。

「だが、持つて行かせはしない。私と行くなら、それは断る。君が豹変しないと云う……」彼は用心深く首を振った。

十月の早い頃だった。小春日和の霞みがかかり、ノース川<sup>6</sup>を二十三町目のフェリーで越える時、太陽は頭の上の白い雲を照らし、流れる川面に反射した。我々の両側には出帆旗を前檣に掲げた大きな船が準備完了して

栈橋にあり、また既に見知らぬ綺麗な港に向かって水道を下っていた。ランポート・ホルト<sup>7</sup>はリオに向かい、

ロイアル・メールの『マグダレーナ』<sup>8</sup>は、昔海賊七人が吊りさ下られたキングストンに向かい、『クライド』は海賊

<sup>6</sup> ハドソン川の南端の別称。

<sup>7</sup> イギリスの船会社。

<sup>8</sup> イギリスの郵便会社。

の発祥地のハイチに向かっていた。『モロ・カッスル』は海賊の王モーガンが一時、支配したハバナに、『レッドD』はどの海賊にも引けを取らない、フランシス・ドレイク卿がその港に眠るポート・カベロに向かっていた。

そして僕は埋もれた宝を探して、舳先を切り詰め、底が平らな河川向けフェリーでジャージーシティに向かっていく。僕が感じたこの屈辱など、誰にも分からないだろうな。イタリア人の若いのが、僕のピカピカの茶色の靴を見て、「磨くか？」と言うのを訊いた時には、絞め殺したい気分だった。

磨いたばかりの靴で、埋もれた宝を堀に行くとはね！しかし、エドガーはそんな事気にしていない。彼に取っては全て完璧、こうあるべきという状態だ。彼はシンガービルに、いくつの貸しオフィスがあるかの計算に没頭していた。

我々が対岸につくと、彼は僕のどんな質問にも答えようとしなかった。彼は、鉄道のどの駅まで、切符を買っているかさえ教えてくれず、僕を黙らせるために、出たばかりの雑誌を僕の手に押し込んだ。

「これだけは教えてくれ」僕は要求した。

「その場所に行った事があるのか？」

「一度」彼は短く答えた。

「先週だ。その時、誰か掘るのに一人要ると分かった」

「どうして、そこが正しい場所だと分かった？」僕は囁いた。

夏の季節は終わり、車両の中には我々二人きりだった。だが、答える前に、廻りと、窓の外を注意深く見た。我々はレッドバンクを通過した処だ。

「地図に書いてあった」彼は答えた。

「例えばね、ニューヨーク市の地図があつて、通りの名前が書いてあると思えよ」彼はじれったそうに言った。

「そこにはブロードウェイと五番街が交叉する処と書いてあると思えよ。そこでフラットアイアンビルを探すとしたらね、見つけれられると思うかい？」

「そんなに簡単だったのかい？」僕は、息を飲んだ。

「そんなに簡単だったのだ」エドガーは言った。

僕は、椅子に沈み込み、雑誌は滑り落ちた。いったどうしたらこの自分の眼の前にある現実から面白い話ができるのか分からなかった。二時間後には、僕はつば一杯の金貨、箱一杯の真珠だのルビーだのを眼の前にも見えないのに！

子供の頃に聞いた、インド帰りのキッド船長が海岸べりに埋めた宝の話しを思い出し始めた。ジャージーの海岸線で安全な港はどこだったか？ 我々が南に向け急いでいるこの汽車の終点はバーネガット湾だ。バーネガットとレッドバンクの間には、今はもう一つマナスクアン川の入り江しか無い。

バーネガットかも知れないし、マナスクアンかも知れない。どちらからとも、そう遠くは無いところだろう。海に向かう砂地だろう。

季節は終わっていて、道の両側の小屋やバンガローの窓は、板で塞いであった。ベランダにはハンモックが吊るされたまま、ボロボロになって風に揺れ、小屋の裏側には冷蔵庫の蓋があいたまま放置されていた。盛大に生えた、アキノキリン草の上には『貸家』の看板がある。

我々が一マイル程、黙ったまま過ぎると、砂っぽい道が深い砂の海岸に変わり、馬車は勝手にそこで止まってしまった。一方の側には、誰もいなくなり、鍵の掛けられた更衣室が並び、反対側には冬に備えて、閉ざされ遮られた休憩所がある。そこには『塩味タフィーはいかが』とか『アイスクリームソーダで涼しくなろう』とかいう看板があった。

ルパートは、これからどうするかと言う風にエドガーを振りむいた。北に向かつては、浜は、マナスクアン入り江まで伸びている。南、三マイルにはベイヘッドのホテルや夏の別荘が蜃気楼の様に浮いて見える。

「入り江に向かって進んでくれ」とエドガーは指示した。

「この方と私は歩いて行く」

我々の重さから解放された馬は道の無い砂地を元氣よく歩き出し、我々は水辺の、濡れて硬くなった砂利を踏みしめて歩いた。潮が満ちてきて波が崩れ、その先を小さな貝殻や石が縁取り、我々のブーツを濡らそうとし、また同時に柔らかな、ゆっくりとした音が、波が寄せる警告になっている。舌のもつれるような呟き、寄せて来る度に発する、碎ける波の咆哮だけしか聞こえない。浜辺には我々の他は誰もいない。

とうとう、周りの景色は冒険のシーンに似始めた。大波の寄せる海、湾岸汽船が黒い煙を吐き、スクーナの残骸が浜辺に出現、マストが酔っ払いの様に傾き、我々の目的に雰囲気を出している。

何か起こりそうな感じになって来て、見られる景色になった。僕はスリルを感じ、ちょっと興奮してきた。僕はエドガーに、哀願し、懇願した。やっと今まで苦しめてきた沈黙が破られた。

<sup>9</sup>この後、駅を降り、ルパートと言う男と馬車を雇って砂地を海岸の方に向かいますが、どうもこの部分が原文から抜け落ちているようです。作者のここまでのスタイルから考えると、作者が意図的に省略したとは思えません。従って、どの駅で下車したか不明です。

「我々は、もう少し高い方を歩こう」彼は命令した。

「足が濡れると、風を引くかもしれない」

僕の気分は余りにもくじかれて、返事も出来なかった。しかし、浜を離れたのは、エドガーには別の意味があることが分かり、やや安心した。一步一步、重々しく、彼は二つの、砂の土手の上に向かった。土手に囲まれた、その内側の窪地には、三本の發育不良の松があった。彼の言葉を思い出した。

『沢山の何とかがあり』。この三本の松の木がどこから何とかな場所にある三つのかんとかの事か？

僕は、背筋がぞくぞくした。僕は魅入られた様に見つめた。膝が砂の中に崩れ落ち、素手で秘密を掘り出す気分だった。あの根っこまで、掘り出す力がある。パナマ運河だって掘る力がある。僕はわなわなと震えながらエドガーを見た。彼は目を大きく開き、うろたえているのが明らかだった。口があんぐり開いている。彼は振り返り、始めて思いやりの目で僕を見た。

彼の姿は謝罪と自責そのものだった。申し訳ない、彼はどもった。僕は、悪い予感がした。僕は悲痛な声を上げた。

「地図を忘れたのか！」僕は叫んだ。

「違う、違う」エドガーは言った。

「だが、昼飯を持つてくるのを忘れた！」

僕は、でかい声で呟きながら、上着と重ね着を脱ぎ捨て、馬車の上に放り上げた。

「どこから始める？」と訊いた。

エドガーは三本の本でできた三角形のちょうど真ん中を指さした。

「あの馬車を、土手の向こう側にやってくれ」私は命令した。

「誰も見えない処だ。それに君とルパートは水平線の下に居ろ」

北および南からは、我々三人は砂の土手に隠れて見えない。東には浜があり、大西洋だ。西側には沼地で一マイル先で松の森となり、鉄道の円形機関庫がある。

僕は、掘り始めた。退屈な時間がかかるだろうと思っていたので、急がず、しかし気合をいれて砂地と格闘を始めた。最初はあまり大変では無かった。しかし、穴が深くなるに連れ、木の根が現れ、仕事は充分、何人分量となった。

しかし、エドガーが言った通り、宝を探して掘り進むというのは日常には無く、また何が現れるかを考えると

僕は自分の手に豆ができたのも、背中の痛みも忘れた。一時間後、僕はエドガーに交代してくれと言った。だが、彼は余りにも進み方が遅く、僕は我慢できなくなって、もう充分休んだから、自分が続けると言った。

彼は敏捷に穴から出てきて、僕のケースから葉巻を取り出すと、馬車に座った。僕は、シャベルが鉄の補強の付いた箱にぶち当たる時のスリルを予想しながら、自分を慰めた。斧の一撃で、隠された宝石、緑青の付いたスペイン銀貨、真珠のネックレス、黄金の鎖を白日に晒すのだ。

エドガーは百万ドルと言った。そうすると、ダイヤがある筈、それも沢山だ。僕の手になんてそれを掴み、眺め、日光で、小さな燃える火に変わる。僕はダイヤの位置を並べ替え、その昔盗まれた時の状態を想像して見る。それはどこかの寺院の聖杯からか、偉大な夫人の胸を飾っていたものか、將軍の柄を飾っていたものか。

そしてさらなる一時間後、僕は痛んだ肩を持ち上げ、眼の中に入った汗をぬぐい穴の縁を見た。ルパートは背中を砂の丘に向けて昼寝している。エドガーは片手で蚊を払いながら、もう一方の手で、途中で買った雑誌を読んでいる。僕には、どのページを見ているかさえ分かった。そいつは朝食用の食材の広告だ。僕が腹をたてた途端、シャベルが、曲がって汗にまみれた手から滑り、穴の底を打つと何かが――鉄のバンド、鉄の鍵、鉄のリング――鈍い音をたてた。

僕の心臓はコーベット氏<sup>10</sup>が握りこぶしで叩いた様に突然止まった。僕の血は、溶けた氷になってしまった。僕はシャベルを、剣でもあるかの様に突き刺した。そして、腐った木に突き刺さった。僕は何の音も立てなかった。殆ど呼吸が出来ない程だったのだ。しかし、ちょっと叩いた音がエドガーの耳に届いた。僕は馬車のスプリングが軋む音を聞き、次の瞬間には彼が僕の上から見下ろし、穴の中を覗き込んでいた。眼は興奮、強欲と怖れで見開かれていた。手には、スーツケースを二つ持っていた。子供を守るライオンみたいに僕を睨みつけた。

「穴から出ろ！」彼は叫んだ。

「出るもんか！」僕は言った。

「出ろ！」彼は大声で叫び、「後は俺がやる。そいつは俺のものだ。お前のものではない。出ろ！」僕は急いで箱を蹴とばし、砂を払った。僕は埋まった木の箱の上に立っていた。錆びた鉄のバンドで補強されている。僕は屈みこみさえすれば触ることが出来た。バンドはもう凄く腐っていて、素手でさえ、引き裂けそうだった。エドガーは穴の端でダンスをしていた。僕の鼻や口に砂をまき散らしながらだ。

<sup>10</sup> ジム・コーベット。1875-1935。狩猟家。インドで人食い虎などを仕留めた。大佐。

「君は約束したろう！」彼は大声で怒鳴った。「君は僕の命令に従うと約束しただろう！」

「馬鹿を言うな！」僕は叫んだ。「穴を掘ったのは僕だろう？　僕がこの箱を……」

「外に出ろ！」とエドガーは大声で言った。

ゆっくりと、むかむかしながら、砂の穴から出る時に可能な限りの威厳を保ち、僕は穴の外に出た。

「そっちへ行け」エドガーは指さして命令した。「そこに座っている」

僕は、怒り心頭に発しながら、ルパートの側に腰を下ろした。彼は相変わらずいびきを掻いて、幸せそうに寝ている。僕の座っているところからは、穴の中で何が進行しているか、一度だけ、エドガーが目をぎらつかせ、髪の毛と眼鏡に砂を散らせて穴の上に首を出した以外、何も見えなかった。明らかに、彼は僕が自分の位置から動いたかどうか恐れていたのだ。僕は動かなかった。しかし、もし彼が僕の最も深い所にある気持ちを知っていたなら、斧を穴の中に一緒に持っていっただろうな。

僕は三十分程座っていたと思う。僕の頭の上の空にはみさごがのんびりと飛んでいた。浜辺からは、単調な波の打ち寄せる音が聞こえ、沼沢地の先の町からは機関車のシュッシュツと言う音と貨物列車のベルの音が聞こえて来た。海からの風が、痛む身体の汗を冷やした。しかし僕の怒りを冷ます事はできなかった。もし僕に勇気があれば、エドガーの頭をシャベルでたたき割って、砂に埋め、ルパートを金で丸め込み、その後ずっと、悪い手段で稼いだ金で、一生楽しく暮らしたに違いない。キッド、モーガンあるいは黒髭はそうやってきた訳だ。

僕は、この退化した文明を呪った。沢山の楽しみを教え、だが同時にその為に人の命——例えばエドガーのでさえ——を奪ってはならぬという良心を植え付けた、これをだ。

三十分位の内にスツケースが現れ穴の縁に置かれた。続いて二個目が現れ、次にエドガーが現れた。

僕に助けを求めようとせず——頼んでも助けなど得られないと知っていたのだろうか——彼は砂を穴の中に戻し、スツケースを馬車につんだ。

こみあげて来る怒りと共に、僕はスツケースの中身は、両手でないと持ち上がらない程重い事に気付いた。

「何を訊いても駄目だからな」彼は宣言した。

「つまり、私は答えないから」

僕は、彼が何処へ行くか非常に注意していたのだが、我々は、全くの無言で駅に戻った。エドガーはルパートに十セントチップをやり、我々がニューヨーク行き汽車を待っている間、切符売り場の壁に二つのスツケースを

立てかけ、その上に座り込んでいた。

汽車が着くと、荒れた小声で、僕は宝の警備を約束したと囁き、スーツケースの一個を僕に持たせた。

そいつは、一トンあるかと思った。エドガーに対する悪意で、そいつを蹴とばして開けてやろうかと思った。そうすればプラットホームに居るみんなが、飛びついてくるかも知れない。しかし、またあの悪魔的なニュー・イングランドの良心が僕を止めたのだ。

エドガーは特別客車の特別客室を用意していた。我々が乗り込み、ロックが掛けられると、僕の好奇心は誇りより強くなった。

「エドガー」と僕は言った。

「君の恩知らずさは軽蔑ものだよ。君の猜疑心は馬鹿馬鹿しい。でもこの異常事態では、非難はしない。しかし、我々は充分安全だ。ドアも鍵がかかっている」僕は、あと四十分は止まらなないと機嫌を取る様に言った。

「宝を見るのにいいタイミングだと思うんだ」

「そうは思わない」エドガーは言った。

僕は、自分の席に沈み込んだ。僕は、この汽車が他の列車と衝突したらどんな面白いだろうと想像した。そしてエドガーを含めた皆が、あるいはむしろ、エドガーが苦しみもせずに即死したらと考えた。

全知全能の神の意志で、僕は百万ドルを相続するという訳だ。それは美しく、満足行く夢だった。僕の良心さえ、自己満足に微笑みながらいいと言ったのだ。余りにも明瞭な夢で、衝突が起こり、叫びと悲鳴、漏れだす蒸気音、壊れる窓ガラスなどを、僕は期待しながら座っていた。

しかし、そんな事は本当に起こる筈が無い。何事も無く、汽車は我々と貴重な荷物を終点のジャージーシティ駅に、安全に運んできた。それぞれが、五十万ドル程を持ち、ポーターや、新聞売りや運転手に助けられ、フェリー乗り場に行った。彼らにとっては我々は自分の荷物を自分で運んで、十セント浮かそうとする通勤客なのだ。

今は、六時になっていて、僕はエドガーにこの時間に開いているのはナイト・デイ銀行だけだと言った。そして、そこまでタクシーで直ちに行った。僕は運転手に払い、二分後にはほっとして息を付き、喜びながらスーツケースを銀行の鉄の壁で覆われた部屋のテーブルに置いた。上の階から急いで呼ばれた行員、私服の警備員、灰色の制服を来た警備員が我々の周りに集まった。

僕の足程の太さもあるかという、鉄棒が我々を防御、岩盤の上に立ち上がる、鋼鉄の壁が我々の宝と外界を隔てている。



その時まで、僕の神経がどの位張り詰めていたか気付かなかった。ようやく緊張がやって来て、額の汗を拭き、深い息をついた。

「エドガー」と僕は、楽しそうに言った。

「おめでとう！」

エドガーは僕に二ドル差し出していた。

「運転手に二ドル払っただろう」と言った。

「料金は一ドル八十セントだったから、二十セント貸しだな」

僕は、機械的に十セント硬貨二杯をテーブルに置いた。

「私が払う事になっている、他の経費に関しては、支払い済だ」とエドガーは横柄な態度で続けた。

「だから、これ以上君を束縛はしないよ」彼は言った。

「お休み」

「お休み」と僕は叫んだ。「宝は見られないのか？」

鋼鉄製の壁に、僕の声は拷問にあった精神の様に響いた。

「触らせてくれないのかよ！」「一目でも見せてくれないのかよ！」

警備員さえ僕に同情している様だった。

「見る事はできない」エドガーは静かに言った。

「君は、合意に基づく責任を完全に果たした。私も、自分の責任は果たした。一年後にはこの話しを書いても

構わない」

僕が、呆然と鉄のドアに向かって歩いていけると、彼の声が僕を立ち止まらせた。

「君は、話しの中で」とエドガーが言った

「埋もれた宝を得るには一つしか方法が無いと書いてもいいよ。つまり、行って、それを取り出すことだ」

---

この短編は、Richard Harding Davis「My Buried Treasure」を翻訳したものです。  
ソースはProject Gutenberg です。(2021年1月)